

親鸞仏教センター通信

2003.
March

第5号

2003年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail tomo-k35@k6.dion.ne.jp

純粹な祈りとは？

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之

「祈り」は、一般的には「宗教の原点であり、本質だ」とされている。ところが、浄土真宗の他力の信心にとって人間が祈るという行為には、「自力」の依頼心が入るからというので、「祈りのこころ」を信心に加えることを否定してきた。ただ阿弥陀の本願による救済に全面的に帰依して、自己の全存在を感謝していればよい、ということだったのである。

もし、「祈り」を肯定するということが、真宗の信心にあるとするならば、人間が特定の事柄について祈ることが、本願力に帰命するという他力の信心にどういう意味に関わるのか。「宗教に祈りが本質だ」としても、親鸞教学の本質にとっては、かなり厳密な検討が必要なのであると言えよう。

この問題は、親鸞聖人が法然上人に出遇われてから、おそらく念仏を信ずるころについて自問自答されるなかから、判然と了解せずにはおれなかった大事な課題である。純粹な信心が、いかにして愚かな煩惱具足の凡夫のこころの上に成り立つのか。本当に人間の違いや状況の差異を超えて、だれにおいても本願の救いが頂けるとはどういうことなのか。もし、本願が一切衆生に平等の救いをもたらすと言うなら、人間においてどういう事実が大切な条件なのか。そういう問題の答えとして、「法然上人の信心も我が信心もひとつなり」という確信を持たれたのであろう。すなわち、人間にとっては「真実の信心」のみが、平等の救済の必要十分条件なのである。しかも、どういう存在であろうとも（罪惡深重・煩惱熾盛^{しじょう}の衆生をも包んで）真実信心を恵もうとするのが、如来本願のご苦勞であると頂かれたのである。

そうすると、「祈り」という人間の心情は、この真実の信心にとってどういう役割になるのであろうか。今から40年余り以前に、鈴木大拙師が『教行信証』を翻訳された折、「本願」の訳語に困られて、“Prayer”をあてられた。キリスト教の伝統によって言葉も理解されている英語圏に、浄土教の思想を伝えることの困難さを教えられたものである。この言葉については、曾我量深師に、「欲生心は、如来の祈りである」という論考がある。人間の根源に一如からの大悲の呼びかけが、「祈り」として響いているということなのであろう。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 非宗教化する現代と浄土の光

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第10回と第11回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第10回では人間の本当の場所と柔軟さについて、第11回では「楽」の問題について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第9回の問題提起からその一部を紹介する。

(越部良一)

■ 現代の非宗教化

私の師匠であった安田理深先生の奥様は、百三歳でお亡くなりになるまで意識が透明で、非常に厳しい言葉で、「若い人は聞法しなさい。人生の目的は何ですか」ということを言い続けて亡くなって行かれた。

その奥様がよく言われていたのは、老人ホームに週一回連れて行かれると、皆、寝ているか、車椅子かだと。人の世話にならずに生きるという事は、もうほとんど九十歳を過ぎたら難しい。よほど達者な人は、たまにはいるけれども、ほとんどの方は自分で自分のことができなくなっている。だから、自分のことを自分でして、元気に歩いている奥様を見ると、皆、「どうしたら、そうやって長生きできるのですか？」と質問する。それで奥様は、「何のために長生きするのですか？」と切り返す。そうすると「何のためでもない。ただ生きたい。そういう人生しか、今はない」と言う。そのことの空虚感とか無意味感に悩む力すら失って、ただ、生きていくというのが今の老人だ、という厳しい批判

をしておられました。つまり精神生活がない。ただ豊かに、ただ経済生活とか、文明生活とかを楽しくおかしく生きられればいいという価値観のもとで生きて、長生きしてしまった。その結果、何もない。ただ生きているということだけで精いっぱい、そこに内容は何にもない。そういうことを見て奥様は嘆いておられました。これが日本の精神生活の現状だ、ということをおつづけていかれたわけですね。そういうことが、現代が非宗教化しているということを実感として感じる形なのだろうと思います。

■ 煩惱の垢

「無垢光炎熾 明 浄 曜 世間」と浄土について天親菩薩は『浄土論』で語っています。「無垢」というのは、煩惱の垢がないという意味です。三垢という言い方をして、貪・瞋・癡というのは三つの垢だという言い方をします。垢は人間の排泄物ですから、人間から出てくるものです。だから、ほこりが外からくっつくというのではなくて、生きているということが生み出してくる汚れです。つまり、煩惱と自分との関係は、自分の外側に煩惱がくっついてくるから取り除いたらきれいになる、そういうのではない。

「煩惱具足」ということは、煩惱を手放すこともできるというのではない。だから、「罪惡深重」と言うのです。都合のいいことは欲しい、というのが欲です。怒り、瞋というのは、自分にとって都合の悪いことを避けたいという意味ですから、貪・瞋は裏・表です。都合のいいことは欲し、都合の悪いことはできるだけ避けようとする、そういう形でしか人間はものを発想

しませんから、貪・瞋というのは外にくっついていてではなくて、人間自身の意思を動かしているひとつのエネルギーであると言ってもよい。貪欲、瞋恚で動いている。しかしそのことを自覚せず、無智である。そういう構造で、言うならば人間のいのちは垢を生み出す。垢は洗い落とせば一応きれいになるように見えるけれど、三日も経てば溜まってくる。中から出てくる、汗みたいなのですから。垢が出なくなったということは、死んだということです。生きていれば垢が出るのと同じように、生きていれば煩惱と共に生きる。それに対して浄土は垢がない。垢がないという言い方で、人間の単なる世俗空間ではない空間のことを言っているわけです。そこから光が来ると。「無垢の光炎」と言われる。

■ 浄土の光炎

炎は、煩惱の怒りの象徴にもなります。善導大師は「二河譬」で煩惱の欲と怒りとを、水の河、火の河に喩えています。その火、人間を焼き尽くすような炎というものが、実は、ある意味で菩提心の象徴にもなる。『十地経』（『華嚴経』『十地品』）という經典では、菩薩の十地の歩みの一番初めの地は「歡喜地」と言い、その次は「離垢地」、垢を離れるというふうに言うのです。第三は「發光地」、第四は「焰慧地」と言いまして、第四に来ると焰が出てくる。つまり、菩提心が磨かれてくると初めは歓び、その次には煩惱の垢を破ってくる。そこから智慧がわいてくる。智慧が磨かれてくると焰になってくると。菩提心が輝いてくるといいますか、そういうことを象徴的に語っているわけです。だから、炎と言うと悪い喩えばかりではなく、非常に積極的な、大きな菩提心の動きをあらわす場合もある。

『浄土論』の、ここでの場合は「浄土の光炎」です。燃えさかるような炎として、浄土がわれわれにはたらきかけていると。そして「明浄」、明らかに清くして世間を曜かす。「曜」は強い輝きをもったはたらきのことで、「世間」とは

われわれの生きている場所です。浄土というのは光り輝いて何をするかと言えば、世間を明るくするのだと。世間を明るくし、清くするというはたらきが浄土の相であると。こういうふうにはたらきとして非常に欲ばれたのだらうと思うのです。欲ばれるということは、逆にそこから離れた時の自分というものは、煩惱の垢であり、精神の闇であり、憂鬱さであり、あるいは無意味さであり、寂しさであり、悲しさであると。

孤独と無意味と空虚と、こういう感情、一個のいのちの感覚というものは、親鸞聖人の時代であろうと現代であろうと同じわけです。それが起こる場面や状況はそれぞれ違うかも知れませんが、そういう言葉で言い当てられる人間の感情は普遍性を持って響いてくる。人間として生きれば、必ずどこかに苦しみや悩みといわれるものを背負って生きている。そうした重層的な精神の闇を、ひとつ剝がし、ふたつ剝がししながら浄土がはたらいてくる。そういうはたらきが浄土なのだ。時間、空間を越えて繰り返し光がはたらいて、われわれの精神を本当の意味で解放し、明るくする。逆に言えば、われわれの闇は、このはたらきから離れればどこまでも深い闇の中に沈んで、光が見えない。こういうことをつくづく感じるわけです。

(文責：センター)

※本講座の第1回から4回までの詳細は、センター発行『現代と親鸞』第2号に所収しています。お申し込みはセンターまで。

「親鸞思想の解明」のご案内

センターでは、本講座を公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2003年3月25日午後6時30分～9時
5月9日 同上

※4月は休講します。

場所：有楽町・東京国際フォーラムG405(3月) G605(5月)
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

他力の意趣にそむけり。

そのゆえは、自力作善のひとは、

ひとえに他力をたのむところかけ

たるあいだ、弥陀の本願にあらず。

しかれども、自力のこころをひ

るがえして、他力をたのみたてま

つれば、真実報土の往生をとぐる

なり。煩惱具足のわれらは、いず

れの行にても、生死をはなるる

ことあるべからざるをあわれみた

まいて、願をおこしたまう本意、

悪人成仏のためなれば、他力を

たのみたてまつる悪人、もつとも

往生の正因なり。

よって善人だにこそ往生すれ、

まして悪人はと、おおせそうらい

き。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

のである。

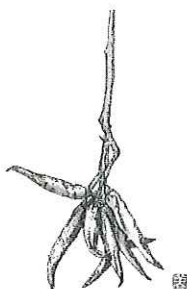
しかし、そのような善人も自力のこころを妄念であると感じて、本願力にすべてをまかせることができるならば、阿弥陀如来の真実の世界へ生まれることができるのである。自らの煩惱(欲望・不安・後悔等)に振り回されている私たちは、どれほど人間的な努力を尽くしてみても、そうした苦しみ(の生活から根本的に解放されることはありえない。このような私たちを深く悲しまれて、本願をおこしてくださったのである。その本願の御こころは、そのような悪人をこそ真に解放してくださるのである。だから、他力にすべてをおまかせする悪人の自覚こそ、真実の自己になる根本的要因なのである。

それで、善人でさえも真実の自己になれるのであれば、なおさら悪人はいうまでもないことである、とおっしゃったのである。

語 註

①【自力作善のひと】自分の意志のみで、どのような条件にあっても善を行えると思っている人。

②【真実報土】如来の大悲によって、いまここに開かれてくる明るい真実の世界。



私の二冊

(藤原正寿)

『スロー・イズ・ビューティフル』

―遅さとしての文化―

辻 信一著(平凡社)

現代は、豊かさという言葉の意味を経済的充足に置き換え、限りなくスピードと効率を重視する社会を生み出している。結果、人はひたすら忙しくなり、豊かさを先送りし、忙しくすることが「人生の意義」であるかのような社会を作り出してきた。

そのバイプロダクトとして、環境問題と社会問題を生み出した。環境や社会の危機を指摘する類書の書は数多くある。本書がそれらと違うのは、単に問題を指摘したり、乗り越えるテクニックを紹介するのではなく、それを私たちの生き方にまで掘り下げ、具体的に示唆していることである。「生態系を危機から救うことができる人とは、まずその生態系を楽しむ人だろう。問題を解決できる人とは、答えを生きている人であるはずだ」と著者は言う。

「世界を救え」と声高に叫び、忙しく走り回るよりも、危機的現代を生きる私たち一人ひとりが、ゆつくりと時には立ち止まって、自らの生き方を確かめることの大切さを投げかけた一冊である。その波紋は徐々に、しかし確実に広がっている。



『聖典』の試訳（現代語化）

あらためて、現代語意識をすることの難しさを感じている。意識とは、その作業過程にどれほどの議論が尽くされていようと、結果的には言葉の置き換えにならざるを得ない。議論を重ね、三百六十度まわって、もとの原文の言葉を残した場合もある。議論の過程は、結果にはあらわれない。安全策を取るならば、もとの言葉を多く残しておくほうがよいに違いない。誰からも間違いを指摘される心配はない。しかし、できるだけ現代人の感性に響く言葉へ翻訳することが、当センターの意図するところでもあろう。

『歎異抄』の言葉を、現代を生きる私がどう受けとめ、どう現代語で投げ返すのか。この制約の前にたじろぎながら、身悶えながら作業を続行している。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第三条〉

原文

善人^{ぜんじん}なおもて往生をとぐ、いわんや悪人^{あくじん}をや。

しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条^{じょう}、一旦^{いつたん}そのいわれあるにたれども、本願

現代語訳

善人でさえも、真実の自己になることができる。まして悪人はいうまでもないことである。

ところが、世間では「悪人でさえ真実の自己になれるのなら、まして善人はいうまでもないことである」といわれている。このことは、一応、もつともなようであるけれども、阿弥陀如来の本願の御^{おん}ころに背^{そむ}くものである。

その理由は、自分の力でいつでも善をなしうると思っているひとは、一心に本願をたのむところが欠けているのだから、弥陀の本願に沿うものではない

親鸞仏教センターの動き

（2002・12～2003・2）

■2002年

12・1 情報誌『atai』第4号、研究誌『現代と親鸞』第2号、機関紙『親鸞仏教センター通信』第4号を発行。

12・4 「親鸞思想の解明」事前懇談会（於・サンルート東京）以降、数回の懇談会を開催。

12・12 第7回英訳「教行信証」研究会。以降、5回の研究会を開催。

12・13 親鸞聖人ご命日のつどい

12・17 第47回研究会（研究・交流・出版の協議と企画）以降、11回の研究会を開催。

12・25 第6回清沢満之研究会「清沢満之における『宗教哲学骸骨』の思想的意義」東京経済大学教授・今村仁司氏（於・東京ガールデンパレス）以降、3回の研究会を開催。

12・26 第16回「聖典」の試訳『歎異抄』研究会。以降、4回の研究会を開催。

12・26 第12回「親鸞思想の解明」連続講座（於・東京国際フォーラム）

■2003年

1・10 親鸞聖人ご命日のつどい

1・18 第5回運営拡大検討会（於・センター）

1・28 第13回「親鸞思想の解明」連続講座（於・東京国際フォーラム）

2・4 第11回英訳「教行信証」研究会「鈴木大拙師の英訳本に学ぶ」元上野学園大学教授・坂東性純氏（於・浅草ビューホテル）

2・12 現代と親鸞の研究会③「いまの家族、これからの家族」安田女子大学教授・春日キスヨ氏（於・東京ガールデンパレス）

2・14 親鸞聖人ご命日のつどい

2・27 第14回「親鸞思想の解明」連続講座（於・東京国際フォーラム）

3・1 「親鸞仏教センター通信」第5号を発行。

現代と親鸞の研究会・第5回

若者の不安

医師 山藤純子(仮名)



「現代と親鸞の研究会」の第5回目は、高橋紳吾氏（精神科医・日本脱カルト研究会代表）のカルト問題に関する問題提起（本紙・前号に紹介）を受けて、昨年7月9日、親鸞仏教センターにおいて、実際にカルトの入信・脱会経験を持つ山藤純子氏（30歳・仮名）をお迎えして開催した。

特に今回の研究会では、現代の若者が何を悩み、何に苦しんでいるのかを、生の声を通してあらためて学び、それを通して親鸞聖人の教えを現代の言葉で語りかけるための手がかりにしたい、という願いから開かれたものである。ここにその一部を紹介する。なお、本人のプライバシー保護のため仮名を用いた。（本多雅人）

■ カルト入信の動機

カルト入信のきっかけとなったのは、今から10年ほど前になります。当時、医科大生だった私は、専門分野の勉強が大変になったうえに、クラブ活動の人間関係で気を使い、家庭内では年老いた祖父母の面倒などで、あれもこれもやろうとして疲れ果てていました。このような状況から抜け出したいと思うと同時に、「自分とは何だろう」と考えるようになりました。

そんな時、ある駅前をうつむき加減で歩いていると、男の人に「手相を見せてもらえませんか？」と声をかけられました。軽い気持ちで見せたところ、「繊細な人なんですね」とか「今、

何か悩んでいることがあるのですか。近くに先生がいるから占ってもらおうといいですよ」と言われました。自分にピッタリのことを言われたので気になり、「もし、変なところだったら、逃げてくればいい」と思って行ってみたのです。

ふと気づいてみると、先生と呼ばれる女性の前で、親にも友達にも話していない自分が抱えている悩みを、涙を流しながら一気に話している私がありました。それで、「ここは宗教ではありませんから安心です。ここで学べば、自然と問題が解決して理想の自分になりますよ」と言われて、「じゃ、ちょっとやってみようかな」と思ってしまったのです。その時の私の状況は、^わ藁にもすがる思いというか、誰かにどうにかしてほしいという私だったのです。

■ カルトの手口

そこでは、教義についてのビデオを観たり、講義を聞いたり、合宿もしました。合宿では、講師の人から同じような話を、何回も何回も繰り返し聞かされ、徐々にそこにいる人たちと仲良くなっていきました。しばらく学んでいくうちに、「実は、ここはA教団です」と打ち明けられました。その時、私は鳥肌が立ったことを覚えています。世間で、カルトのことがいろいろと言われていたところで、すごくショックだったのです。でも、自分ではとてもいいところだと思い始めていたので、どうしてこの教団に対して反対派の人が出たり、マスコミなどが騒ぎ立てるのか、よくわかりませんでした。でも、

自分で納得できるよう、私は学び続けました。

A教団では、「自分がいいと思うのだったら、その道を信じて突き進みなさい。反対派の人の意見やテレビや本などは、一切見てはいけません」とも言われました。ただ、疑問に思ったことは質問しましたが、「それは、学んでいくうちにわかるんですよ」などと言われ、一方で、曖昧にされたというような体験でした。

正確に言うと、私はA教団の正会員ではなくて、その一步手前だったのです。だから、何かちょっと違う道に行っているようにも思ったので、教団の人たちだけの話を聞くのではなくて、反対派の人の意見も聞きたいと思って、本を読んだり、情報を集めたりしました。その中で、A教団のある元信者の体験手記を読んで、大変驚きました。というのは、正会員になったその元信者が入信していく体験と、自分の体験が、本当によく似ている経路で、それがマニュアル化されていることを知り、大きなショックを受けました。

その後、A教団を脱会した反対派の方々とお会いする機会を得ました。反対派の代表者の方は、多くの人たちを脱会させた人でした。話を聞くうちに、間違いなくそこがA教団であると確信し、「脱会しなくてはいけない」と、そこで初めて自分で決めて、次の日から行かなくなりました。自分からは行かなくなったけれども、もちろんA教団側の人は納得しなくて、いろいろとアプローチをして来ましたが、「もう、この人に何を言っても聞かない」と伝わったのか、それからは何も言って来なくなりました。

■ 解決しない心の問題

こうしてA教団を脱会したのですが、根本的に問題が解決したわけではありません。その後も、また同じことを繰り返すというか、友達から「自己啓発セミナーに参加してみないか」という話を持ち込まれました。私は自分の体験から、「きっと、このセミナーもカルトだな」と思っ

て、ずっと断り続けていたのですが、結局、私は、「本当の自分とは何なのか」「本当の自分は どうしたいのか」ということを知りたくて、そこに参加してしまったのです。

どうしてそういうことを繰り返すのか、よく考えてみると、私自身、自分に満足していなかったり、「こういう自分になりたい」と思っているながら、その方法が見つからず、常に理想を追い求めているのです。現在の自分というものをきちんと受け入れずに、ただ理想から今の自分を見ているわけですから、とても苦しみました。

例えば、A教団では「教団に通っていることは家族には黙っていた方がいい」と言われました。しかも、入信する時は、「自分の一番大切なものを捨てて来なければいけない」ということがあって、それが家族であったり、自分の財産であったりするわけです。A教団でも自己啓発セミナーでも、いつも自分の家族を脇に置いてしまっているんですね。だから、親や財産を全部捨てて、いきなり入信してしまうから、当然、家族は驚いてしまいます。

私は、目の前の家族をまったく大事にしていなかったことに気づいてからは、とにかく医師の免許を取ろうと決めて、自己啓発セミナーとも縁を切りました。現在、医師となった私の生活もいろいろな問題を抱えています。そして、「自分とは何だろう」という根本的な問題は、まだ解決していません。実は今、自己啓発セミナーではない、別のセミナーに通っています。これから先、どうなるかわからないですけども、とにかくいろいろなことを学び、体験して、自分が創造する家族、仲間たち、それが社会まで広がり、大げさに言えば、日本になって、世界になってと広がっていけばいいと感じている自分です。
(文責：センター)

※山藤純子氏の問題提起と質疑は、前述の高橋純吾氏との研究会記録と併せて、センター発行『現代と親鸞』第3号(6月1日号)に所収予定です。

■ 清沢満之研究会を発足

この研究会は、「清沢満之研究『宗教哲学骸骨』読解」と題して、2002年7月から月1回のペースで進めています。テキストには『宗教哲学骸骨』（以下、『骸骨』と表現）を選び、各章を読み進める形で行っています。以下、研究会について報告します。

① 『骸骨』を読む意味

(1) 清沢満之の思索の原点を学ぶ

『骸骨』は清沢の宗教哲学者としての側面が端的に示されている書物であり、満之における本格的思索の出発点である。満之の初期の思想、ことに宗教理解をたずねるうえで、重要な書物である。

(2) 満之の思索の全体像をとらえる

哲学を学んでいたことが、後の思索にどのような影響を与えたのか、あるいは与えなかったのかについても視野に入れつつ、学んでいく。

(3) 日本の宗教哲学の原型を確認する

日本最初期の本格的な宗教哲学の著作である『骸骨』を始めとする清沢の宗教理解は、後の思想界にも影響を与えた。その意味で、『骸骨』を学ぶことは日本の宗教哲学の原型を確認することとなる。

清沢自身が『骸骨』の講義で述べているように、「宗教哲学」は当時ようやく確立された領域であった。つまり、清沢は当時における最新の方法を用いて、宗教の本質を明らかにしようと試みたのである。その意味では、若き学徒としての満之の決意がうかがい知ることができる。

② 研究会から見えてきたもの

研究会の具体的な方法としては、『骸骨』本文と1893(明治26)年にシカゴで行われた「万国宗教大会」に提出された『骸骨』の英訳文を用いている。両者をそれぞれ現代語に訳し、そこから見えてきた問題点などを議論している。論点は多岐にわたるが、これまでに、例えば次のような点が挙げられた。

(1) 清沢の「道理心」理解について

『骸骨』の第1章では、宗教心と道理心の関係が述べられている。清沢は「若し道理と信仰と違背することあれば、寧ろ信仰を棄てて、道理を取るべきなり」と述べ、「信仰は道理によりて矯正」されるものであるとすると、道理に対して信頼をしていた。しかし、その一方で「道理は其の性質不完全を免れざるもの」であるとも

している。道理と信仰は「互に相依り、相助くべき」であるとしていたが、清沢において道理心はどのように位置づけられていたのか。

(2) 主伴互具について

「主伴互具」は『骸骨』の最重要概念の一つである。その主伴互具という関係について知ることが「宗教の要」(原文)であり、「深い宗教的確信」(英訳)であると清沢は述べる。しかし、主伴互具、つまり有限はそれぞれ主-伴の連関を有しているという認識は、宗教的確信よりもむしろ哲学的確信のようにも思える。それをあえて「宗教的確信」と述べる清沢の意図はどこにあったのか。

この他、有限無限の関係についてなど、議論した点は多数あり、今後の研究会において、一層、問題点を確かめていきたいと考えている。

③ 今村仁司先生をお迎えして

昨年、12月17日には、東京ガーデンパレス(文京区)において東京経済大学教授の今村仁司先生(写真)をお迎えし、「清沢満之における『宗教哲学骸骨』の思想的意義」と題してご講演をいただいた。今村先生は、『骸骨』の背後にある西洋思想の系譜から『骸骨』の思想的意義について講義をされるとともに、『骸骨』の問題点や読

む際の注意点などにも言及され、後の質疑も含め、今後の研究会に大変重要な視座をいただいた。



当センターからほど近い場所には、東京大学と求道会館があります。言うまでもなく、前者は満之が学んだ場所であり、後者には現在「浩々洞発祥の地」の石碑が建てられています。その意味でセンターは、思索に耽ったであろう、若き満之の息吹を想像しつつ『骸骨』を学べるという、またとない場所です。満之が再び注目されている今、この研究会も満之理解の一助となれるよう、微力を尽くしたいと考えています。(田村見徳)

あ と が き

旧臘、末期がんと宣告された新聞記者・佐藤健さんが、「生ける者の記録」と題して自身の体験談が織り込まれたルポルタージュの連載(毎日新聞)に感銘を受けた。病と死を真正面から見据える記事に、感謝や激励の言葉が多く読者から寄せられた。そこには、人間の生へのすさまじい執着といのちのたくましさ、そして、これほどまでに人間は強くなれるものか、そんな驚きがある。佐藤さんは、「死」というものがどれほど重いものか、その裏返しとして「生」がどれほど重いものか、読者から逆に教えられた」と言う▼昨年、『AERA』(朝日新聞社10月21日号)にも紹介され、がんと闘う患者と一っしょになって、ホリスティック医学という独自の医療に取り組んでおられる帯津良一医師との研究会を開いた(詳細は、センター発行「現代と親鸞」第2号に所収)。帯津医師は言う。「病状が悪化して、明るく前向きでいられる患者さんはひとりもおりま

せん。皆さん暗くなります。人間は本来明るく前向きに出来てはいません。人間は寂しくて悲しいものです。(中略)でも、患者さんにとって、一番大事なのが『希望』なのです。その希望とは、今日よりも良い明日という希望なのです。常に『希望ある死』です。その希望は、健康な状態に戻るといふ希望でなくていいのです。だから、そういう希望を持ち、死を見つめている人たちが周りでサポートすれば、それが一番良いわけです」と▼佐藤さんと帯津医師、お二人の話には人の顔が見える。そして、そこには心に響く言葉がある。生きた言葉がある。私たちにとって、「いちいちの言葉に、どれだけ魂と身体を重ねて語るかが何より大事ではないか」(『アンジャリ』第4号)と語られた辺見庸氏(作家)の言葉が胸を熱くした▼残念だが、12月28日、佐藤さんは自らの病と闘われて60歳で命終された。謹んで哀悼の意を表したい。(長谷岡)